

「真理はあなたを自由にする」

牛田匡牧師

聖書 ヨハネによる福音書 8章 31-36節

非常に大型で強い台風 10 号が、自転車並みと言われる位に非常にゆっくりとした速度で九州地方から四国地方を通過し、近畿地方を通過し、今はまた南の方から中部地方を北上中とのことです。大雨や河川の氾濫などで、浸水したり、土砂崩れが起きたりした地域の映像が報じられていますが、それを見ると、各地で甚大な被害が出ていることが分かります。しかも、今回はそのような台風本体からまだ遠く離れているにもかかわらず、関東地方や東海地方でも、局所的な豪雨が続けていると言いますので、台風の進路予想が難しいだけでなく、各地の天気も予想がつかない事態が続いています。そんな状況でしたから、昨日も今日も、この辺りでは落ち着いた天候が続いていますが、この後どうなるのかが分からないという不安が続いています。

漠然とした不安がある時、私たちは気持ちの上でも落ち着かず、何だかソワソワしたり、居ても立ってもいられない、という事もあるかと思えます。例えば、台風のことにしても、大雨や大風の映像を見ながら、「この後ここにも台風が来るのかもしれない」と考えるのは不安です。ですから、窓の外の様子を確認したり、台風の進路予想を見たりしながら、外に置いてあるものを片付けたり中に入れたりして、備えをしたりしました。漠然とただ怖がるのではなく、事実を確認しながら、事実に基づいて行動することで、不安は多少は和らぎ、私たちの心も平静を取り戻すことが出来るのではないかと思います。

「漠然とした不安感」ということについて、最近の出来事として、もう一つ挙げられることに、「米不足」のことがあります。8 月の中頃から各地のスーパーマーケットなどの店頭からお米が無くなり、米不足が話題となりました。大阪府の吉村知事は、夏休みが終わって「学校では 2 学期が始まったのにお米がないのはけしからん」ということなのか、「子どもたちがお弁当箱に、ご飯ではなくパンを詰めていくのはおかしいではないか」という理屈を展開し、政府に備蓄米を出すようにと要請していましたが、農林水産省からは却下されたと報じられていました。当たり前です。そもそも毎年 9 月に新米が出始める前の 8 月は、各店舗も新米の入荷を見込んで、前年のお米の売れ残りを減らすために在庫量を少なくなる時期であり、そこに「南海トラフ巨大地震注意」という突然の初めての注意喚起が気象庁から出されたために、多くの人々がお米の買い溜めに走りました。さらに物流業者の方々のお盆休みが重なったために、次の入荷まで物が届かないということになり、今回の事態に至ったようです。ですから、当初から「9 月には例年通りに新米が

出回って来るから、慌てて買い溜めに走らないように、落ち着いて行動するように」と何度も報じられていました。そうこうしているうちに、近所のお店でも新米が並び始めましたし、新米だけではなく旧来のお米もチラホラ店頭に戻って来ました。

昨年のお米の収穫量自体も不作で少なかったわけではありませんし、8月時点でも市場の需要に対する供給量は十分に確保されているという農水省の発表の通りで、ただ単に人々の漠然とした不安からお米の買い溜め行動が生じて、店頭にあった在庫がそれぞれの人のお家に移動しただけのことだったのだらうと思います。店頭からは確かにお米は消えましたが、パンや麺類などの小麦製品は普段通りに並んでいましたし、食べる物が無くなってしまふということはありませんでした。それでも「困った時はお互い様」ということで、今回のことを受けて身近な所ではお互いに「お米はまだありますか。大丈夫ですか」という温かい声が聞かれたこともありました。

不安な時こそ、落ち着いて事実を確認しなければならないと思いますし、各自が買い溜めをするのではなく、隣の人と分け合い、助け合う行動をとらなければ、さらなる不安を生み、時に集団心理は時にとんでもない方向に進んで行ってしまいます。今回は単に一時的にお米がお店に売っていないだけで済みましたが、お米が無くなった理由として「コロナ禍が明けて、再び外国人観光客が大勢やって来たインバウンド需要のせいだ」というとんでもない屁理屈、言いがかりまで出て来たのには驚かされました。外国から来た旅行者一人が食べる量はたかが知れていますから、落ち着いて考えれば「そんなはずはない」ということは誰でも分かるはずなのにもかかわらず、流言飛語がまことしやかに広がっていき、それが差別やヘイト発言へと容易につながっていきかねないということを、改めて恐ろしいことだと思わされました。

さて今回の聖書の言葉、「真理はあなたがたを自由にする」(32)という言葉は、有名な言葉ですので、どこかで耳にされたこともあるかもしれません。この言葉を基にして、国立国会図書館のカウンターの上にも「真理はわれらを自由にする」と、その開館当初から刻み付けられています。戦後まもない1948年に起案された国立国会図書館法の前文に、この言葉は明記されているそうですが、戦前戦中の思想統制への反省に立ち、人類の叡智・真理が納められている図書館として、そこから人間は自由になっていくのだ、という宣言だったのだらうと思います。

この言葉が記されている元々の「ヨハネによる福音書」8章では、イエス様はこの言葉を「ご自分を信じたユダヤ人たち」(31)に対して言われたとあります。「ご自分を信じた」とありますから、一見するとイエス様を信じて、その後につき従った「弟子たち」「信仰者たち」のことかと思われるかもしれませんが、そうではありま

せん。この後の 37 節には「あなたがたは私を殺そうとしている」という物騒な言葉があるように、イエス様の対話の相手はイエス様の周りに集まって来た大勢の群衆達でした。彼らはイエス様のことを煩わしく思い、敵対視していた当時の宗教指導者たち、祭司長たちやファリサイ派の人々と一緒にいた人たちということで、わざわざ「ユダヤ人たち」と記されています。そもそもイエス様自身も、その周りにいた多くの弟子たちも皆「ユダヤ人」でしたから、ここで「ユダヤ人たち」とわざわざ書く必要はないのですが、「あえて書いてある」ということは、自分たちとは違う相手として認識されていたからに他ならず、その中身はイエス様に関心を寄せつつ、何かあったら揚げ足を取ったり、告発をしたりしようと目論んでいたのではないかと思います。

そのような人たち、「ご自分を信じた」と記されながらも、実際にはイエス様のことを信頼もしていなければ、行動も伴っていないようなユダヤ人たちに対してイエス様は「私の言葉にとどまるならば、あなたがたは本当に私の弟子である。あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にする」(31-32)と言われました。つまり、裏を返せば、「『私の言葉』にとどまっていないあなた方は、今のままでは『本当の私の弟子』ではないよ」ということです。ここで言われている「言葉」とは、単にイエス様が話された事だけではなく、その言動の全て、イエス様の言葉と振る舞い、生き様のことを表しています。ですから「私の言葉にとどまる」とは、イエス様と共にイエス様と同じ道を歩む、同じように生きるということです。またイエス様は別の箇所でも「我は道なり、真理なり、命なり」(ヨハネ 14:6)とも言われていますが、そのことを考えても、ここで言われていることは、「私と同じ道を歩むなら、それは真理の道、真実の道であって、あなた方はそれによって自由になるのだよ」ということなのだろうと思います。

それでもユダヤ人たちは、そのイエス様の言葉を自分事としては受け止めず、他人事として受け止め、屁理屈で返答しました。「私たちはアブラハムの子孫です。今まで誰かの奴隷になったことはありません」(33)。この言葉は非常に差別的な発言です。ヘブライ語聖書の「創世記」に記されているアブラハムは、古代イスラエル民族の父祖と考えられていますので、その子孫の数はまさに数えきれない程になっていたはず(創世記 13:16)。言い換えれば、「人類みな兄弟」という言葉ではありませんが、「あなたも私もみんなアブラハムの子孫」であるはずなのに、それにもかかわらず「私たちはアブラハムの子孫です」という発言があったというのは、「あの人たちは異邦人の血が混じっているから、アブラハムの子孫ではない。私たちと一緒にではない」という線引きをしていたということに他なりません。

また「奴隷」という言葉も、そうです。そもそも古代イスラエル民族は、エジプトで

奴隷であった所から解放されたというのが、その民族意識、アイデンティティーでした(申命記 26:5-9)。そのため「みんな奴隷だった経験を持っている」はずなのに、「今まで誰かの奴隷になったことはありません」と言っています。ここには明らかに「奴隷」を見下している視点が存在あります。確かに「奴隷」は、他人に売買される存在であり、主人・雇い主の指示に従わねばならず自由がありませんでした。しかし、律法の規定によれば、お金を出して贖い、買い戻すことによって、権利・身分を回復することも出来ましたし、また一定期間が経てば解放される、解放しなければならない、とも定められていました。ですから、実際には数は少なかったかもしれませんが、町の中には奴隷だけではなく、解放奴隷も何人もいたはずで、そのような中で、「私たちは今まで一度も奴隷になったことはありません」と人を見下し、自信満々に語るような人たちをたしなめるようにして、イエス様は「よくよく言っておく。罪を犯す者は誰でも罪の奴隷である」(34)と言われました。

ここで言われている「罪」(ハマルティア)とは、「当たり・はずれ」の「外れ」を意味する言葉です。あるべき所、目指すべき目標、歩むべき道から外れているということ。即ち、イエス様がその身をもって、言葉と振る舞いをもって示された道、人を大切にし、互いの命を生かし合う道から外れている、ということです。「自分たちは、あのような人たち、汚らわしい異邦人・異教徒、奴隷たちとは違う。自分たちは律法を順守できていて、清く正しく、神様から喜んでもらっている」と自負し、思い込み、高慢になっていた人たちに対して、イエス様は「あなたたちはちっとも自由じゃないね。何て不自由なんだろうね」と言われたのだらうと思います。

本当の自由とは、「〇〇しなければならない」「〇〇しなければ、△△になってしまう」というような罰則や恐怖を伴うものでもなく、また漠然とした不安に囚われてビクビクと怯えているようなものでもないはず。「真理はあなたを自由にする」と言った時の「真理」とは、何か難しい宗教的な秘儀や秘密でも何でもなく、ただ単純に「事実」のことであり、誰にでも分かること、誰にでも理解できて実行できることです。だからこそ誰もが解放されることが出来る。みんなが安心して、ホッと一息をつくことができる、そういうものではないでしょうか。

「真理はあなたを自由にする」。人は不安に弱い生き物です。一人一人が孤立化し、つながりが分断される時、不安に襲われるとひとたまりもありません。ちょっとしたことでパニックになりますし、飛び交うデマや噂から容易に差別やヘイト発言が生じて、犯人像が勝手に作り出されて行きます。そのような流言飛語に惑わされる事なく、私たちはただ事実、真実にのみ従い、そして不安からも解放され、自分自身を束縛するあらゆるものからも自由になって、イエス様の歩んだ道を共に歩む者へと変えられていきます。